

都賀庭鐘：読本の漢語

岡島，昭浩
九州大学大学院（修士課程）

<https://doi.org/10.15017/12017>

出版情報：語文研究. 57, pp.13-22, 1984-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

都賀庭鐘 読本の漢語

岡 島 昭 浩

「語彙研究の対象が文学作品に偏している」とよく言われる。しかし文学作品の語彙研究は、難語の意味研究に偏していて、特に漢語などの現代語との関連等は、佐藤亨氏の仮名草子、鈴木丹士郎氏の読本等の他にはあまり見えないようである。一語一語の研究は、解釈上の難易にかかわらず、重要であると考えるが、その語誌の記述の際、用例の背景をおさえておくことが要求される。それには、文学研究の立場から、中村幸彦氏の指摘もあるが、語学的立場からも、その文献に、いかなる語が、いかなる傾向で見られるかを、おさえておきたいと考える。

私はここで読本の漢語をとりあげるが、それは、現代漢語の中に読本の時期までさかのぼるものがありそうだ、というのが、一つの理由である。

文語的で、話し言葉などにはあらわれにくいもの——例えば漢語の一部等が、現代語に残っている（幾時代かを通じてあらわれる）

場合、それは読みつがれ、書きつがれていくことによって後世に伝えられた、という過程を考えることが出来よう。例えば、洋学に關わる語などは、学問の発展とともに読みつがれたものであって、専門用語として定着したものなどは特にそのようなことが言えるのではなからうか。一方、読本などの文学作品においては、それらとはおのずと違った一群の語を有するものと考えられる。例えば鈴木丹士郎氏が「読本の語彙」（注②参照）にあげている「万事休」「苦肉計」「老婆深切」などと言ったものは文学に特徴的なものであろう。先学の業績を参考にしつつ、読本の漢語と現代語との関連を探してみる。例えば、

手下あたまの前後あたましらぬこつが乞こ丐がを五六十人引連つれ一いっ齊せいに浄じやう応おんが家に来る
(英草紙二)

衆しやう鬼き一いっ齊せいに前まへみより、手てをひ扯き、脚あしをひ扯き
(衆鬼ももつに) (英草紙五)

とある「一齊」は、小学館「日本国語大辞典」（以下「日国大」と略記）では、このようないちどきという意味では「小説字彙」の

一齊 イッショニソフロフナリ
をあげる他は、すべて明治期の用例である。尚、この意味では「大

漢和辞典】(以下「大漢和」と略記)は「紅樓夢」の例しかあげず、漢籍でも明清の頃、多用されたようである。

次に、

只其結末の頌歌ふた言みことを先にきくと (莠句冊六)

とある「結末」は、漢籍では、「水滸全伝」に見えるが、「日国大」では明治の用例のみをあげる。

「見識」という語は、「日国大」では「風来六部集」「源頼家源実朝鎌倉三代記」の用例を古いものとしてあげるが、読本にも、

原より大見識ありておもふやう

(英草紙五)

是又我見識のかぎり知れて口惜しからん

(英草紙六)

其一見識にて言及せば言べからざるにはあらず (莠句冊一)

湖水を飛跨の見識をやめてよ

(莠句冊九)

とあり、意味の上で現代語との関連に少し問題は残るが、読本の頃にまでさかのぼる語のようである。「大漢和」では、「二程全書」「紅樓夢」「京本通俗小説」「警世通言」の用例をあげ、他にも、「水滸全伝」「二十年目睹之怪現狀」「儒林外史」、元曲「望江亭」「硃砂擔」「馬陵道」等に見られるもので、白話の中で多用されたものようである。

以上にあげたもの他にも、現代漢語の中で読本の頃までさかのぼりうるものが、いくらかもありそうである。

又、現代語の源流を考える際、「中国近世の神史小説が輸入され、それらを通して、漢語がさらにその数を増していった」という指摘がある。神史小説の輸入に関しては、石崎又造氏「近世日本に於ける支那俗語文学史」に詳しいが、その中にも、「俗語文学を通じて

輸入せられた近世支那語に關しても研究すべき筈であるが、之等は他日の増訂に俟たい」とある。その後も、神史小説の輸入等、近世唐話学については、麻生磯次氏⁽⁶⁾、中村幸彦氏⁽⁷⁾、宗政五十緒氏⁽⁸⁾等による論考がある。その中で唐話語彙に關しては、荒尾頑秀氏⁽⁹⁾、藥科勝之氏⁽¹⁰⁾、近現代の漢語との關係を論考したものがある。

では、神史小説の翻案であることが多い読本は、どのような漢語を使用したものであろうか。麻生磯次氏は読本の漢語の特異さを他の小説類と比較して言っているが、それが神史小説の輸入による語であれば、唐話辞書の項目のような外国語ではなく、国語の中で使われたもの、ということにならう。馬琴の読本については麻生磯次氏等も指摘するように、次の文によって、その神史小説中の語の使用がわかる。

拙文。唐山なる俗語さへ抄し載て。且意訓をもて。彼義を知しむ。要なき所爲に似たれども。世に独学孤陋にて。唐山の神史小説を。読まく欲する諸生あらば。其が筌蹄になれかしと思ふ。作者の老婆親切なりけり。(南総里見八大伝第九輯)

下 軼中卷第十九簡端贊言⁽¹¹⁾

このように、馬琴はある意図があつて、中国の俗語——神史小説中の語を読本の中に取り込んでいた。しかし、それは他の読本にも言えることなのであろうか。又、読本における漢語の特異さは、中国神史小説からの影響ということだけで律しきれものなのだろうか。又、そのように読本の中で使われた語のうち、現代語にまで残っているものに、どういふものがあるのか。このようなことを考えてゆくのが本稿の目的である。

尚、本稿において読本の中でも、都賀庭鐘の読本をとりあげるの

いるのかという問題などを考えるのである。

それでは、読本とその原話とを比較対照することによって何が明らかになるであろうか。「英草紙」への中村幸彦氏の註は、その語について、原話に見える旨を示すことがある。これは一語一語について見るもので、例えばある語の語誌を記す際、「英草紙」に見える語で、原話と一致するものを用例としてとる場合には、その旨記すべきであろうと思われる。例えば、「万事休す」という言い方に関して、鈴木丹士郎氏は「宋史」「小説精言」の例と、「英草紙」「椿説弓張月」「南総里見八犬伝」の例をあげ、「おそらく中国の白話小説の用語にもついたものであろう」と推定している。これは、「水滸全伝」「二十年目睹之怪現狀」にも見えるものである。この「英草紙」の例を原話と対応させて見ると、

今夜真に死せば、ばんじきゅう 万事皆休す
こんにや 今夜真に死せば、ばんじきゅう 万事皆休す
なにごとともそれまじ

(英草紙八)

となっていて、少くとも「英草紙」の例に関しては、氏の推定が当たっていて、他の例もおそらく同様のことになると思われる。

一方、これを一語一語ではなく、巨視的に見るとどういふことになるのか。これは、読本の漢語の特異さVと言われるものを、原話からの影響という面で明らかにするためのものである。

では、原典に見えないものはどういふ意味をもつのであろうか。原話に見えないと言ってもそれは一樣ではない。原話が明らかでないものはおくとして、A文章の意味は原話に対応しているが、その話の部分は別のものから言い換えられているものVと、A原話にない話の部分に使われているものVとに分けて考えることが出来る。ここでどのような語に換えられているか、どういふ漢語が使わ

れているかを見ることによって、都賀庭鐘の読本における漢語使用の意識がうかがわれるのではなからうか。

原話にその語形が見られないものの中に、当時、あまり一般に使われることのないものが多くあれば、それは庭鐘の読本におけるA漢語の特異さVが、中国小説の翻案であることの反映だけではない、ということにならう。又、それが漢籍側においてもどのような性質のものかを探ることができれば意義があらう。つまり、庭鐘が、そのAあまり一般に使われることになかったものVをどこから持ってきたのか、と言ふことを探るものである。

三

1 「英草紙」に見える漢語のうち、まず「日国大」等によって、これ以前の用例が明らかかなものをのぞくと、A漢語の特異さVとされるものが見えてくるはずである。この中にはA漢語Vとまでは呼べない、形だけの臨時に一語となったような語も含まれている。そういったものも含めて、これらの語のうち、原話に一致した語形の見られるものは、文字通りA中国の神史小説の影響になる語Vと言つてよからう。

勿論、神史小説——白話小説も、その頃になってから使われ始めた語だけで綴られているのではない。その中に、古くから使われているものがあったも、それが読本にそのまま表記されていけば、それは「白話小説からの影響」である。又、それがその当時までの日本語にあまり見られない語であれば、漢籍での使用とは関りなく、その語は「白話小説からの影響によって日本語の中に漢語の形をと

った」ということにならう（漢籍に古い例があれば、日本語に現れる基盤に、その例を持つ漢籍が日本で読まれた、ということもあるだろうが）。

例えば「公明」という語は、

若決断明白成時は、功を以て罪を恕し、公明ならざると

き、即罪に行ふ時は、彼が心大に服すべし（英草紙五）

彼に公事を聴、獄を決せしめ、決断公明ならば、彼来世、

極富極貴、今生抑鬱の苦に酬ひ（同）

と見え、原語ではそれぞれ、

着他判断、若断得公明、将功恕罪、倘若不公不明、即時行罰、他心始服也

容他放告理獄、若断得公明、来生注他極富極貴、以酬其今生抑鬱之若

とあり、原話の影響下にある語と知れる、これを漢籍に探ると、

「大漢和」で、梁の劉峻「弁命論」の例をあげ、古くある語のようであるが、日本側では古い用例が明らかでなく、「日国大」には幕末・明治のものしかあげていない。

「刺客」なる語は、

主上に引引くものありて、宣旨の使を竊ふものあるか、

しからずは或は盜賊の此舟の財宝を心に掛て潜みかくれ

て、候更を待なるべし。（中略）岸上に人の声して、船中

の人々騒玉ふな。某盜賊刺客の類にあらず（英草紙三）

想是有仇家差来刺客、不然或是賊盜伺候更深、登舟劫我財物、

（中略）忽聽得岸上有人答应道、舟中大人、不必見疑、小子並非奸盜之流、乃樵夫也。

と、完全に対応するものではないが、語としては原話の影響下に

あるものと考えてよからう。これは漢籍では「史記」に「刺客列伝」

があるように古くから用いられている。しかし、「日国大」は「英

草紙」を初出例としていて、それ以前の用例の有無は明らかではな

い。又、この語は原話との対照を行い難い部分にも、

土佐正俊を都に登せ、刺客を行しめんとす（英草紙五）

と見える。

漢籍においても古い用例が見出せないものとして、「更正」とい

う語をあげる。

彼腐儒者、閻羅王と作つて、刑罰を更正さんといへる

は狂妄ならずや。（中略）彼者何の本事ありて一一に更正す

ることを得ん（英草紙五）

他欲作閻羅、把世事更正、甚是狂妄（中略）偏他有基本事

一一更正来

これは「大漢和」では「清国行政法汎論」の例をあげるのみで、

「日国大」でも「英草紙」を初出にしている。

又、先程あげた「一斉」も原話に対応するものである。それぞれ、

叫起五六十個丐戸、一斉奔到金老大家裡来

衆鬼不由分説、一齊上前、或扯手、或扯脚

が原話の部分である。

又、これは現代語にまでは残っていないものだが、「駭然」とい

う語は、鈴木丹士郎氏もあげるように、「南総里見八犬伝」「権説

弓張月」の他、明治期にも用例が見える。これは「大漢和」では

「国史略」の用例しかあげていない。が、

衆人駭然たり

(英草紙八)

衆人俱各駭然

と対応して、白話小説の影響になる語であることがわかる。これは、「水滸全伝」「儒林外史」「紅樓夢」等にも見える語のようである。

以上の他に、原話に対応するものがあり、それ以前の日本での用例が明らかでなく、且つ現代語にまで残っているものをあげる。

一塊 快々 果然 氣運 義女 賢弟 資性 大言
入舎 脳髓 抑鬱
いりへ まんぞくせぬ はたして おさへふさがれ

21原話と対応しないものうち、文脈上は原話通りだが、その語の部分を書き替えているものは、易しい語におきかえるのではないかと思われるが、実際は必ずしもそうではないようである。

例えば、現代語にはないものだが「離異」という語について見ると、原話で、

第二妻 有過被出

とあるものが、

次の妻は 過ありて離異したり

(英草紙四)

となっている。この語は、はなれことなっているという意味では「楚辞」の用例をもつが、離婚の意味では、「大漢和」は「明律」の例を古いものとする。

「恩人」という語では、

幸然天大可憐得遇恩爹提救 収為義女

天の 憐ありて今の恩人に救ひあげられ、養ふて義女とす

(英草紙二)

「恩爹」は「大漢和」に項目がない。「恩人」も項目のみで用例をあげぬが、「儒林外史」に見えるようである。「日国大」では、「花柳春話」以下の用例が見えるのみである。

「助力」は、

借三五百銭来做盤纏

(英草紙八)

これは漢籍では「漢書」からあるものだが、「日国大」には人情本の例をあげるのみである。

以上の他に、原話から言い換えているもので、その頃までの日本語の用例の有無が明らかでなく、且つ現代語にまで残っているものをあげる。

応報 街上 竿頭 官服 貴君 茶房 賞金 転生
むくひ ちまた さほのさき ちやみせ はうび うまれかわる
反目 便服 兩親

22原話に対応する部分がない部分は、庭鐘の比較的自由な漢語使用が期待される。しかし、やはりそこにも、その頃までの日本の用例の有無が明らかでない語があらわれている。

例えば「款待」という語は「日国大」では、「英草紙」を初出例とする。

悦び面にあらはれ、民部をとめて
和盤托出して是

(英草紙六)

何をかなと従者に命じて、酒を酌て款待する内、東方白く
なりて
(英草紙三)

このうち、前者の方は原話が不明の部分だが、後者の方は、

復命取援酒再酌、(中略) 談論正濃、月淡星稀、東方発白

という箇所につけ加えたものようである。「大漢和」では「剪燈

余話」「福惠全書」の例をあげ、他には「紅樓夢」「二十年目睹之

怪現狀」「兒女英雄伝」等に見える。又、これは「唐話彙要」で

款待 クワンダイ
款待 モテナシ

とあり、「小説字彙」でも

款待 (マメ)
款待 ナス

とあって、唐話学によってもたらされた語のようである。又、表記

の面では「莠句冊」に、

道人喜び款待て恙なく、やがてこそとて別れぬ(莠句冊八)

とあり、又、秋成の

井曰の力はた款すに足されども

(雨月物語一)

の「款」を「もてなす」と読めるのは、「款待」という形の存在な

しには考え難いという、山口紀子氏の論がある。

尚「管待」というものもあり、これも秋成に、

酒菓子種々と管待しつゝ

(雨月物語四)

と見えるが、こちらは「大漢和」では、元曲と「紅樓夢」をあげ

る。他にも「水滸全伝」「二十年目睹之怪現狀」「儒林外史」「兒

女英雄伝」「西遊記」等に見えるようである。

又、「大漢和」に唐代の用例をあげる「款待」は、「日国大」で明

治以降の用例をとる。この三者は、中国では、款—溪母、管—見

母、款—曉母、と異っているが、日本では同音のため、混用したと
も考えられる。いずれにしろ、この三者共、これ以前には日本での
用例は見出してない。

「模擬」は、第三篇の中の日本の琴について語る部分に、

雅楽の曲に模擬して

とあるが、これは「日国大」では「孔雀楼筆記」を初出とするもの

である。漢籍では古くから見られる。

以上の様に、原話から離れて自由に書かれたものの中にも、以前

の日本での用例が明らかでないものは、いくらかもあるようである。

このことは、庭鐘の読本の漢語に前代までは見えなかったものがあ

る、ということが、白話小説の翻案ということの反映Vだけでは

ないことを示すものであろう。又、このような話の中にも、漢籍で

は古いところからあるもの、宋代あるいは明代以降のものと思われ

るもの、今のところ漢籍での使用が明らかでないもの等がある。こ

れは、原話に対応する語のところで述べたようなこととあわせて、

庭鐘の読本中の漢語には、白話特有の語彙を借入したものだけでは

なく、古くからあるもので日本語に定着していなかったもの等を、

漢語として使用したものもある、ということになろう。

このように漢語の多い文章ではあるが、その漢語の多さにひかれ

て、庭鐘自身が造語することがなかったかという疑問は興味深いも

のである。日本でそれ以前に用例がなく、漢籍での使用が明らかで

ないものは、そういった意味でもう少し考察すべきである。これは、

漢籍、日本のどちらかでも古い例があれば、庭鐘の造語ではなかる

うと思われるのでこのことは今後の課題としたい。ことを庭鐘だけ

でなく読本全体に広げた場合にも、鈴木丹士郎氏があげる「漢籍類

における典故を明らかにしえない語」中の「近世に用例のみとめられるもの」等に含まれる語は多くあって、これらもその意味で検討していくべきものであろう。

以上の他に、原話に対応箇所がなく、以前の日本の用例がなく、且つ現代語に残っているものは次の如くである。

一碧 横暴 家系 口腹 相愛

3最後に、序文、及び原話の不明なもの、原話との対照が行い難いもの、等の中に見える漢語について、これ以前の用例が明らかでない語で、且つ現代語に残っている語は次の如くである。

開運 雅俗 俠氣 奇談 凶兆 醜聞 茶話 殘忍 市街
巡拜 將士 情人 掌文 真情 帳簿 直言 嫖客 婦道
不良 遊戲

四

「古今奇談」という同じ角書きをもち、「英草紙後篇」という柱題をもつ「繁野話」、同じく「続篇」の『莠句冊』は、当二書の序文を信じると、「英草紙」と同時に書かれたものようである。近路行者三十年前。因小説教十種を戯作して茶話に代ゆ。千里浪子其中に就て。英草紙九種を摘て書林に授たるは、廿年に早なりぬ

古今奇談三十種は、近路の翁延享の初に稿成たるを。至りて其梓を数に充なむと計るよしを聞て。むかしの春は英

と虚称し、ふりぬる秋にはしげくと荒ましかりて。

(莠句冊序)

この二作は原話があまり明らかにはされていないので、その翻案態度を「英草紙」のそれと比較して漢語の性格を探る、ということとは困難である。

この二作の左側の振仮名は、「英草紙」のそれに比して、かなり減っている。それで、前代までの用例の不明な語が少いかというところでもなく、又、その前代までの用例の不明な語に絞ってみても、左振仮名が少ないという傾向は変わらない。それは左に示す、現代語に残っているものだけの例でもわかるであらう。ここでは、この二作についてはあまり穿鑿をせず、現代語との関係だけを考えることにする。

「繁野話」において、それ以前の用例は明らかでなく、現代語に残っているもの、

異常	一計	一語	姻属	演義	艶麗	解語	怪物	花街	還元
干城	机上	戲作	基本	旧家	近時	軍師	軍略	系累	激論
險所	巧拙	口碑	婚家	再思	祭事	山塞	産物	自明	弱卒
謝辞	謝礼	宿駅	宿題	情愫	食膳	新粧	生活	生辰	盛粧
青楼	世代	絶壁	千辛万苦	戰略	僧衣	俗称	退隱	大喝	
大金	大差	題名	他姓	脱兔	地名	忠死	伝奇	洞穴	排斥
半日	美観	必用	福利	仏徒	富民	妾名	方位	咆吼	万鈞
密使	名勝	明断	門生						

「莠句冊」において、以前の用例が明らかでなく、現代語に残っ

ているもの

安逸	安色	異種	偉人	鬱蒼	応答	怪獸	開城	怪力	家族
雅致	褐色	活動	花卉	雅名	監識	鑑賞	鑑定	監督	貴家
機器	奇遇	軌道	美男	急務	嬌羞	愚弄	閨秀	芸林	
結末	公命	古雅	混用	砂洲	弒逆	使役	死屍	自炊	実用
事物	熟思	入来	商家	将家	商議	常体	詳密	女流	進達
進呈	瑞兆	水利	水量	世代	属国	粗暴	対応	大志	
多数	茶器	長文	著明	同一	当主	同調	内乱	日勤	発狂
発行	発作	万謝	分家	美称	婢僕	武人	満場	妙技	明窓
野乘	友誼	幼名	俚語	連累					

右に見える語を含めて、「繁野話」「秀句冊」中の漢語に、種々の性格のものがあることは、「英草紙」と同様であろう。すなわち庭鐘の読本三部作には、それ以前にはあまり使われなかったと思われる漢語の一群があり、その中には現代語にまで残っているものはいくらかもあるが、その漢語の中にも、中国白話小説の翻案であることとの反映という点だけではない要素があることが推定された。これは庭鐘に、唐語学を含めた漢学の素養があったことに関わることと思われる。

△読本の祖Vにおいて見られるこのような状況は、後代の作品にはどういう影響を与えたのであろうか。一ジャンルをなすにいたる読本の中でも、先に示した馬琴の如き態度、建部綾足の如き和文脈で翻案する態度など、種々のものが見られ、こうした点については

今後、各読本を見て行く上での課題としたい。

註

- (1) 佐藤亨氏「近世語彙の歴史的研究」(昭和55年)「近世語彙の研究」(昭和58年)所収のもの等
- (2) 鈴木丹士郎氏「馬琴の語彙」(「専修国文」1号)、「里見八大伝」の漢語語彙についての一試論(同11号)、「里見八大伝」に見える漢語語彙(「専修大学論集」1号)、「近世文語の問題」(「専修大学論集」3号)「読本における漢字語の傍訓——「雨月物語」と「椿説弓張月」を中心に」(「近代語研究」第2集)「読本の語彙」(「講座日本語の語彙国近世の語彙」)
- (3) 「語義と用語例——江戸時代語研究批判」(「国語学」113号)
- (4) この語は佐藤喜代治氏「国語語彙の歴史的研究」中に考察されている。
- (5) 佐藤喜代治氏「日本の漢語」「近世の漢語概説」の項。
- (6) 「江戸文学と中国文学」等
- (7) 「読本発生に関する諸問題」(「中村幸彦著述集」第五卷)「名物六帖」の成立と刊行」(同第十一卷)「上方の唐語学界——「剪燈隨筆」によって」(「近世文芸稿」4号)他「著述集」第七卷所収の諸論等
- (8) 「近世中期における京都の白話小説家たち」(「近世文苑の研究」)他
- (9) 「唐語辞書の語彙」(「講座日本語学国現代語彙との史的対照」)等
- (10) 「増補言葉集」△小説語Vの出典考察—「国語辞書と唐語辞書との一交渉」(「国文学研究」67)等
- (11) 「日本名著全集」「南総里見八大伝」による。
- (12) その他、注②「読本の語彙」の「馬琴の文章観」をも参照。
- (13) △読本Vというジャンルに関しては、横山邦治氏「読本の研究」等を参照。
- (14) 「中村幸彦著述集第十一卷」所収。又、同書所収の「都賀庭鐘の中国趣味」をも参照。
- (15) この他には文化三年刊「義経書石伝」がある。
- (16) 小学館「日本古典文学全集」48「英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語」の解説(中村幸彦氏執筆)等による。
- (17) 庭鐘の翻案態度に言及したものは、重友毅氏「翻訳翻案文学としての近世小説

名を略した所がある。

——特に怪談物を中心として」(『国語と国文学』15・4) 斎藤護一氏「江戸時代に於ける支那小説翻案の態度」(同) 麻生磯次氏前掲書第二章等、尾形仿氏「中国白話小説と『英草紙』」(『文学』昭和41・3) 和田松江氏「都賀庭鐘と中国短篇白話小説——その享受をめぐって」(『香椎』22) 石破洋氏「都賀庭鐘の翻案態度——『英草紙』第三篇における琴を中心」(『東洋学』55号) 等がある。

08 注06の書。

09 注02の論。

04 本稿で考察の対象とするのは、原則として音読の振り仮名が付されているものである。右に音読の仮名が振られていて、左に訓あるいは注の仮名が振られているものもあるが、それも対象とする。

02 注(4)に同じ。

02 注(2)の論。

04 現代語に残っているという認定は『新明解国語辞典』で行った。

04 享保元年刊。岡島冠山。『唐話辞書類集』第六集による。

04 寛政三年刊。著者未詳。『唐話辞書類集』第十五集による。

04 「『兩月物語』の用字」(『東京女子大学日本文学』60)

07 第一篇 第五篇のように、逐字訳でない部分。

08 注06に同じ。

本稿で本文として用いたのは以下のものである。

「英草紙」「繁野話」「莠句冊」九州大学文学部蔵。中村幸彦氏「読本発生に関する諸問題」(注(7)参照)によると、「英草紙」は四版にあたり、「繁野話」も初版ではないが、「版下は皆同じ」とある。

「古今小説」世界書局刊 民国47年、「影印者以内閣文庫蔵本為主、其残缺部分則以尊経閣蔵本補足之。」とある。

「警世通言」世界書局刊 民国47年、「今據李田意博士所撰日本名古屋蓬左文庫所蔵 明金陵兼善堂本景印。」とある。

引用に際しては、適宜 通行の字体に直し、句読点を補い、振仮